

ヨハネ福音書

第一章

一 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。二 この言は太初に神とともに在り、三 萬の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。四 之に生命あり、この生命は人の光なりき。五 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。六 神より遣されたる人いでたり、その名をヨハネといふ。七 この人は證のために來れり、光に就きて證をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん爲なり。八 彼は光にあらず、光に就きて證せん爲に來れるなり。

九 もろもろの人をてらす眞の光ありて、世にきたれり。一〇 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。一 一 かれは己の國にきたりしに、己の民は之を受けざりき。二 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる權をあたへ給へり。三 かかる人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ、神によりて生れしなり。四 言は肉體となりて我らの中に宿りたまへり、我らその榮光を見たり、實に父の獨子の榮光にして、恩恵と眞理とにて満てり。五 ヨハネ彼につきて證をなし、呼はりて言ふ、『わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我が曾ていへるは此の人

なり。一六 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加へらる。一七 律法はモーセによりて與へられ、恩恵と眞理とはイエス・キリストによりて來れるなり。一八 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます獨子の神のみ之を顯し給へり。

一九 さてユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とをヨハネの許に遣して、『なんぢは誰なるか』と問はせし時、ヨハネの證はかくのごとし。二〇 乃ち言ひあらはして諱まず、『我はキリストにあらず』と言ひあらはせり。二一 また問ふ、『さらば何、エリヤなるか』答ふ、『然らず』問ふ、『かの預言者なるか』答ふ、『いな』二二 ここに彼ら言ふ、『なんぢは誰なるか、我らを遣しし人々に答へ得るや』つにせよ、なんぢ己につきて何と言ふか。二三 答へて言ふ、『我は預言者イザヤの云へるが如く、主の道を直くせよと、荒野に呼はる者の聲』なり。二四 かの遣されたる者はバリサイ人なりき。二五 また問ひて言ふ、『なんぢ若しキリストに非ず、またエリヤにも、かの預言者にも非ずば、何故バプテスマを施すか』二六 ヨハネ答へて言ふ、『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に汝らの知らぬもの一人たてり。二七 即ち我が後にきたる者なり、我はその鞋の紐を解くにも足らず』二八 これらの事は、ヨハネのバプテスマを施しめたりしヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。

二九 明るる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給ふを見ていふ、『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。』三〇 われ曾て、『わが後に來

る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云ひしは此の人なり。三 我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに顯れたために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり。三ヨハネまた證をなして言ふ「われ見しに、御靈鴿のごとく天より降りて、その上に止れり。三 我もと彼を知らざりき。されど我を遣し水にてバプテスマを施させ給ふもの、我に告げて、なんぢ御靈くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖靈にてバプテスマを施す者なる」といひ給へり。三 四 われ之を見て、その神の子たるを證せしなり」

三五 明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、三六 イエスの歩み給ふを見ていふ「視よ、これぞ神の羔羊」三七 かく語るをきて、二人の弟子イエスに従ひゆきたれば、三八 イエス振り返りて、その従ひきたるを見て言ひたまふ「何を求むるか」彼等いふ「ラビ(釋きていへば師) いづこに留り給ふか」三九 イエス言ひ給ふ「きたれ、さらば見ん」彼ら往きてその留りたまふ所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろなりき。四〇 ヨハネより聞きてイエスに従ひし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。四一 この人まづ其の兄弟シモンに遇ひ、われらメシヤ(釋けばキリスト)に遇へり」と言ひて、四二 彼をイエスの許に連れきたれり。イエス之に目を注めて言ひ給ふ「なんぢはヨハネの子シモンなり、汝ケパ(釋けばペテロ)と稱へらるべし」四三 明くる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあひて言

ひ給ふ「われに従へ」四四 ピリポはアンデレとペテロとの町なるベツサイダの人なり。四五 ピリポ、ナタナエルに遇ひて言ふ「我らはモーセが律法に録ししところ、預言者たちが録しし所の者に遇へり、ヨセフの子ナザレのイエスなり」四六 ナタナエル言ふ「ナザレより何の善き者が出づべき」ピリポいふ「來りて見よ」四七 イエス、ナタナエルの己が許にきたるを見、これを指して言ひたまふ「視よ、これ眞にイスラエル人なり、その表に虚偽なし」四八 ナタナエル言ふ「如何にして我を知り給ふか」イエス答えて言ひたまふ「ピリポの汝を呼ぶまへに、我なんぢが無花果の樹の下に居るを見たり」四九 ナタナエル答ふ「ラビ、なんぢは神の子なり、汝はイスラエルの王なり」五〇 イエス答へて言ひ給ふ「われ汝が無花果の樹の下に在るを見たりと言ひしに因りて信するか、汝これよりも更に大なる事を見ん」五一 また言ひ給ふ「まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけて、人の子のうへに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし」

第二章

一 三日めにガリラヤのカナに婚禮ありて、イエスの母そこに居り、ニイエスも弟子たちと共に婚禮に招かれ給ふ。三 葡萄酒つきたれば、母イエスに言ふ「かれらに葡萄酒なし」四 イエス言ひ給ふ「をんなよ、我と汝となにの關係あらんや、我が時は未だ來ら

ず『五母僕どもに』何にても其の命ずる如くせよ』と言ひおく。  
 六 彼處にユダヤ人の潔の例にしたがひて、四五斗入りの石甕  
 六個ならべあり。セイエス僕に『水を甕に滿せ』といひ給へば、  
 口まで滿す。ハまた言ひ給ふ『いま汲み取りて饗宴長に持ちゆ  
 け』乃ち持ちゆけり。九饗宴長、葡萄酒になりたる水を嘗めて、  
 その何處より來りしかを知らざれば（水を汲みし僕どもは知れ  
 り）新郎を呼びて言ふ、『〇おほよそ人は先よき葡萄酒を出し、  
 酔のまはる頃ほひ劣れるものを出すに、汝はよき葡萄酒を今ま  
 で留め置きたり』セイエス此の第一の徴をガリラヤのカナにて  
 行ひ、その榮光を顯し給ひたれば、弟子たち彼を信じたり。  
 二三この後セイエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下り  
 て、そこに數日留りたり。

二三かくてユダヤ人の過越の祭ちがづきたれば、セイエス、エルサ  
 レムに上り給ふ。二四宮の内に牛・羊・鴿を賣るもの、兩替する  
 者の坐するを見て、一五繩を鞭につくり、羊をも牛をもみな宮よ  
 り逐ひ出し、兩替する者の金を散し、その臺を倒し、一六鴿をう  
 る者に言ひ給ふ『これらの物を此處より取り去れ、わが父の家を  
 商賣の家とすな』一七弟子たち『なんじの家をおもふ熱心われを  
 食はん』と録されたるを憶ひ出せり。一八ここにユダヤ人こたへ  
 てセイエスに言ふ『なんち此等の事をなすからには、我らに何の徴  
 を示すか』一九答へて言ひ給ふ『なんぢら此の宮をこぼて、われ  
 三日の間に之を起さん』二〇ユダヤ人いふ『この宮を建つるには

四十六年を経たり、なんぢは三日のうち之を起すか』二一これ  
 はセイエス己が體の宮をさして言ひ給へるなり。二三然れば死人  
 の中より甦へり給ひしもの、弟子たち斯く言ひ給ひしことを憶  
 ひ出して、聖書とセイエスの言ひ給ひし言とを信じたり。  
 二三過越のまつりの間、セイエス、エルサレムに在すほどに、多く  
 の人々その爲し給へる徴を見て御名を信じたり。二四されどイ  
 エス己を彼らに任せ給はざりき。それは凡ての人を知り、二五  
 また人の衷にある事を知りたまへば、人に就きて證する者を要  
 せざる故なり。

### 第三章

一ここにパリサイ人にて名をニコデモといふ人あり、ユダヤ人  
 の宰なり。二夜セイエスの許に來りて言ふ『ラビ、我らは汝の神よ  
 り來る師なるを知る。神もし偕に在さずば、汝が行ふこれらの  
 徴は誰もなし能はぬなり』セイエス答へて言ひ給ふ『まことに誠  
 に汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の國を見ること能はず』四  
 ニコデモ言ふ『人はや老いぬれば、争で生るる事を得んや、再  
 び母の胎に入りて生るることを得んや』五セイエス答へ給ふ『ま  
 とに誠に汝に告ぐ、人は水と靈とによりて生れずば、神の國に入  
 ること能はず、六肉によりて生るる者は肉なり、靈によりて生  
 る者は靈なり。七なんぢら新に生るべしと我が汝に言ひしを怪

しむな。八風は己が好むところに吹く、汝その聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知らず。すべて靈によりて生る者も斯くのごとし。九ニユテモ答へて言ふ。いかで斯かる事どももあり得べき。一〇イエス答へて言ひ給ふ。なんぢはイスラエルの師にして、猶かかる事どもを知らぬか。一一誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを證す、然るに汝らその證を受けず。一二われ地のことを言ふに汝ら信ぜずば、天のことを言はんには争で信ぜんや。一三天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。一四モーセ荒野にて蛇を擧げしごとく、人の子もまた必ず擧げらるべし。一五すべて信ずる者の彼によりて永遠の生命を得ん爲なり。』

一六それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。一七神その子を世に遣したまへるは、世を審かん爲にあらず、彼によりて世の救はれん爲なり。一八彼を信する者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の獨子の名を信ぜざりしが故なり。一九その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行爲の惡しきによりて、光よりも暗黒を愛したり。二〇すべて惡を行ふ者は光をにくみて光に來らず、その行爲の責められざらん爲なり。二一眞をおこなふ者は光にきたる、その行爲の神によりて行ひたることの顯れん爲なり。

三二この後イエス、弟子たちとユダヤの地にゆき、其處にともに

留りてバプテスマを施し給ふ。三三ヨハネもサリムに近きアイノンにてバプテスマを施しむたり、其處に水おほくある故なり。人々つどひ來りてバプテスマを受く。三四ヨハネは未だ獄に入られざりしなり。三五ここにヨハネの弟子たちと一人のユダヤ人との間に、潔につきて論起りたれば、二六彼らヨハネの許に來りて言ふ。ラビ、視よ、汝とともにヨルダンの彼方にありし者、なんぢが證せし者、バプテスマを施し、人みなその許に往くなり。二七ヨハネ答へて言ふ。人は天より與へられずば、何をもうけること能はず。二八「我はキリストにあらず」唯「その前に遣されたる者なり」と我が言ひしことに就きて證する者は汝らなり。二九新婦をもつ者は新郎なり、新郎の友は、立ちて新郎の聲をきくとき大に喜ぶ、この我が勸喜いま満ちたり。三〇彼は必ず盛になり、我は衰ふべし。』

三一上より來るものは凡ての物の上であり、地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。天より來るものは凡ての物の上であり。三二彼その見しところ聞きしところを證したまふに、誰もその證を受けず。三三その證を受くる者は、印して神を眞なりとす。三四神の遣し給ひし者は神の言をかたる、神、御靈を賜ひて量りなければなり。三五父は御子を愛し、萬物をその手に委ね給へり。三六御子を信する者は永遠の生命をもち、御子に従はぬ者は生命を見ず、反つて神の怒その上に止るなり。

## 第四章

一 主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネよりも多しと、パリサイ人に聞えたるを知り給ひし時、二（その實イエス自らバプテスマを施ししにあらざり、その弟子たちなり）三 ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給ふ。四 サマリヤを経ざるを得ず。五 サマリヤのスカルといふ町にいたり給へるが、この町はヤコブその子ヨセフに與へし土地に近くして、六 此處にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給ふ、時は第六時頃なりき。七 サマリヤの或女、水を汲まんとて來りたれば、イエス之に「われに飲ませよ」と言ひたまふ。八 弟子たちは食物を買はんとて町にゆきしなり。九 サマリヤの女いふ「なんぢはユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか」これはユダヤ人とサマリヤ人とは交りせぬ故なり。一〇 イエス答へて言ひ給ふ「なんぢ若し神の賜物を知り、また「我に飲ませよ」といふ者の誰なるを知りたらんには、之に求めしならん、さらば汝に活ける水を與へしものを」一 女いふ「主よ、なんぢは汲む物を持たず、井は深く、その活ける水は何處より得しぞ。二 汝はこの井を我らに與へし我らの父ヤコブよりも大なるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり」三 イエス答へて言ひ給ふ「すべて此の水をのむ者は、また渴かん。四 されど我があたふる水を飲む者は、永遠に渴くこと

なし。わが與ふる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし」五 女いふ「主よ、わが渴くことなく、又ここに汲みに來ぬために、その水を我にあたへよ」六 イエス言ひ給ふ「ゆきて夫をここに呼びきたれ」七 女こたへて言ふ「われに夫なし」イエス言ひ給ふ「夫なしといふは宜なり。一八 夫は五人までありしが、今ある者はなんぢの夫にあらざり。無しと云へるは眞なり」九 女いふ「主よ、我なんぢを預言者とみとむ。二〇 我らの先祖たちは此の山にて拜したるに、汝らは拜すべき處をエルサレムなりと言ふ」二 イエス言ひ給ふ「をんなよ、我が言ふことを信ぜよ、此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拜する時きたるなり。三 汝らは知らぬ者を拜し、我らは知る者を拜す、救はユダヤ人より出づればなり。三三 されど眞の禮拜者の、靈と眞とをもて父を拜する時きたらん、今すでに來れり。父はかくのごとく拜する者を求めたまふ。三四 神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり」三五 女いふ「我はキリストと稱ふるメシヤの來ることを知る、彼きたらば諸般のことを我らに告げん」二六 イエス言ひ給ふ「なんぢと語る我はそれなり」二七 時に弟子たち歸りきたりて、女と語り給ふを怪しみたれど、何を求め給ふか、何故かれと語り給ふかと問ふもの誰もなし。二八ここに女その水瓶を遺しおき、町にゆきて人々にいふ、二九「來りて見よ、わが爲しし事をことごとく我に告げし人を。この人あるいはキリストならんか」三〇 人々町を出でてイエスの許にゆ

く。三この間に弟子たち請ひて言ふ『ラビ、食し給へ』。三イエス言ひたまふ『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』。三弟子たち互にいふ『たれか食する物を持ち来りしか』。三四イエス言ひ給ふ『われを遣し給へる物の御意を行ひ、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。三五なんぢら收穫時の来るには、なほ四月ありと言はずや。我なんぢらに告ぐ、目をあけて畑を見よ、はや黄ばみて收穫時になれり。三六刈る者は價を受けて永遠の生命の實を集む。播く者と刈る者とともに喜ばん爲なり。三七俚諺に、彼は播き此は刈るといへるは、斯において眞なり。三八我なんぢらを遣して、勞せざりしものを刈らしむ。他の人々さきに勞し、汝らはその勞を收むるなり』

三九此の町の多くのサマリヤ人、女の『わが爲し事をことごとく告げし』と證したる言によりてイエスを信じたり。四〇かくてサマリヤ人御許にきたりて、此の町に留らんことを請ひたれば、此處に二日とどまり給ふ。四一御言によりて猶もおほくの人信じたり。四二かくて女に言ふ『今われらの信するは、汝のかたる言によるにあらず、親しく聽きて、これは眞に世の救主なりと知りたる故なり』

四三二日の後、イエスここを去りてガリラヤに往き給ふ。四四イエス自ら證して、預言者は己が郷にて尊ばる事なしと言ひ給へり。四五かくてガリラヤに往き給へば、ガリラヤ人これを迎へたり。前に彼らも祭に上り、その祭の時にエルサレムにて行ひ

給ひし事を見たる故なり。

四六イエス復ガリラヤのカナに往き給ふ、ここは前に水を葡萄酒になし給ひし處なり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みあたれば、四七イエスのユダヤよりガリラヤに來り給へるを聞き、御許にゆきて、カペナウムに下りその子を醫し給はんことを請ふ、子は死ぬばかりなりしなり。四八ここにイエス言ひ給ふ『なんぢら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』。四九近臣いふ『主よ、わが子の死なぬ間に下り給へ』。五〇イエス言ひ給ふ『かへれ、汝の子は生くるなり』。彼はイエスの言ひ給ひしことを信じて歸りしが、五一下る途中、僕ども往き遇ひて、その子の生きたることを告ぐ。五二その癒えはじめし時を問ひしに『昨日の第七時に熱去れり』といふ。五三父その時の、イエスが『なんぢの子は生くるなり』と言ひ給ひし時と同じきを知り、而して己も家の者もみな信じたり。五四是はイエス、ユダヤよりガリラヤに往きて爲し給へる第二の徴なり。

第五章

一この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り給ふ。ニエルサレムにある羊門のほとりに、ヘブル語にてベテスタといふ池あり、之にそひて五つの廊あり。三その内に病める者盲人、跛者、瘦せ衰へたる者ども夥多しく臥しあたり。(水の動

くを待てるなり。四 それは御使のりをり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先に池に居る者は、如何なる病にても癒ゆる故なり。五 爰に三十八年病になやむ人ありしが、六 イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に「なんぞ癒えんことを願ふか」と言ひ給へば、七 病める者こたふ「主よ水の動くとき、我を池に入る者なし、我が往くほどに、他の人さぎだち下るなり」八 イエス言ひ給ふ「起きよ、床を取りあげて歩め」九 この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

その日は安息日に當りたれば、一〇 ユダヤ人醫されたる人にいふ「安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず」二 答ふ「われを醫ししその人、床を取りあげて歩め」と云へり。三 かれら問ふ「取りあげて歩め」と言ひし人は誰なるか。三 されど醫されし者は、その誰なるを知らざりき、そこに群衆あたればイエス退き給ひしに因る。四 この後イエス宮にて彼に遇ひて言ひたまふ「視よ、なんぢ癒えたり。再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる悪しきこと汝に起らん」五 この人ゆきてユダヤ人に、おのれを醫したる者のイエスなるを告ぐ。六 ここにユダヤ人、かかる事を安息日になすとて、イエスを責めたれば、七 イエス答へ給ふ「わが父は今にいたるまで働き給ふ、我もまた働くなり」八 此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと欲す。それは安息日を破るのみならず、神を我が父といひて、己を神と等しき者になし給ひし故なり。

一 九 イエス答へて言ひ給ふ「まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給ふことを見て行ふほかは、自ら何事をも爲し得ず、父のなし給ふことは子もまた同じく爲すなり。二〇 父は子を愛して、その爲す所をことごとく子に示したまふ。また更に大なる業を示し給はん、汝等をして怪しましめん爲なり。二一 父の死にし者を起して活し給ふごとく、子もまた己が欲する者を活すなり。

二二 父は誰をも審き給はず、審判をさへみな子に委ね給へり。二三 これ凡ての人の父を敬ふごとくに子を敬はん爲なり。子を敬はぬ者は、之を遣し給ひし父をも敬はぬなり。二四 誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給ひし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。二五 誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の聲をきく時きたらん、今すでに來れり、而して聞く人は活くべし。二六 これ父みづから生命を有ち給ふごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、二七 また人の子たるに因りて、審判する權を與へ給ひしなり。二八 汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の聲をききて出づる時きたらん。二九 善をなしし者は生命に甦へり、惡を行ひし者は審判に甦へるべし。

三〇 我みづから何事もなし能はず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給ひし者の御意を求むるに因る。三一 我もし己につきて證せば、我が證は眞ならず。三二 我につきて證する者は他にあり、その我につきて證

する證の眞なるを我は知る。三三 なんぢら前に人をヨハネに遣ししに、彼は眞につきて證せり。三四 我は人よりの證を受くる事をせねど、唯なんぢらの救はれん爲に之を言ふ。三五 かれは燃えて輝く燈火なりしが、汝等その光にありて暫時よろこぶ事をせり。三六 されど我にはヨハネの證よりも大なる證あり。父の我にあたへて成し遂げしめ給ふわざ、即ち我がおこなふ業は、我につきて父の我を遣し給ひたるを證し、三七 また我をおくり給ひし父も、我につきて證し給へり。汝らは未だその御聲を聞きし事なく、その御形を見し事なし。三八 その御言は汝らの衷にとどまらず、その遣し給ひし者を信ぜぬに因りて知らるるなり。三九 汝らは聖書に永遠の生命ありと思ひて之を查ぶ、されどこの聖書は我につきて證するものなり。四〇 然るに汝ら生命を得んために我に來るを欲せず。四一 我は人よりの聲をつくる事をせず、四二 ただ汝らの衷に神を愛する事なきを知る。四三 我はわが父の名によりて來りしに、汝等われを受けず、もし他の人おのれの名によりて來らば之を受けん。四四 互に聲をつけて、唯一の神よりの聲を求めぬ汝らは、争で信ずることを得んや。四五 われ父に汝らを訴へんとすと思ふな、訴ふるもの一人あり、汝らが頼とするモーセなり。四六 若しモーセを信ぜしならば、我を信ぜしならん、彼は我につきて録したればなり。四七 されど彼の書を信ぜずば、争で我が言を信せんや』

第六章

一 この後イエス、ガリラヤの海、即ちテベリヤの海の彼方にゆき給へば、二 大なる群衆これに従ふ、これは病みたる者に行ひたまへる徴を見し故なり。三 イエス山に登りて、弟子たちと共にそこに坐し給ふ。四 時はユダヤ人の祭なる過越に近し。五 イエス眼をあげて大なる群衆のきたるを見て、ピリポに言ひ給ふ『われら何處よりパンを買ひて、此の人々に食はすべきか』六 かく言ひ給ふは、ピリポを試むるために、自ら爲さんとする事を知り給ふなり。七 ピリポ答へて言ふ『二百デナリのパンありとも、人々すこしづつ受くるになほ足らじ』八 弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言ふ九 『ここに一人の童子あり、大麥のパン五つと小き肴二つとをもてり、されど此の多くの人には何にかならん』一〇 イエス言ひたまふ『人々を坐せしめよ』その處に多くの草ありて人々坐せしが、その數おほよそ五千人なりき。一一 ここにイエス、パンを取りて謝し、坐したる人々に分ちあたへ、また肴をも然なして、その欲するほど與へ給ふ。一二 人々の飽きたるのち弟子たちに言ひたまふ『廢るものなきよ』三 乃ち集めたるに、五つの大麥のパンの擘きたるを食ひしもの餘、十二の筐に滿ちたり。一四 人々その爲し給ひし徴を見ていふ『實にこれは世に來るべき預言者なり』

一五 イエス彼らが来りて己をとらへ、王となさんとするを知り、復ひとりにて山に遁れたまふ。

一六 夕になりて弟子たち海にくたり、一七 船にのり海を渡りて、カペナウムに往かんとす。既に暗くなりたるに、イエス未だ来りたまはず。一八 大風ふきて海ややに荒出づ。一九 かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、船に近づき給ふを見て懼れたれば、二〇 イエス言ひたまふ『我なり、懼るな』二一 乃ちイエスを船に歎び迎へしに、船は直ちに往かんとする地に著けり。二二 明くる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘のほかに船なく、又イエスは弟子たちと共に乗りたまはず、弟子たちのみ出でゆきしを見たり。二三 時にテベリヤより數艘の船、主の謝して人々にパンを食はせ給ひし處の近くに来る(二四)ここに群衆はイエスも居給はず、弟子たちも居らぬを見て、その船に乗り、イエスを尋ねてカペナウムに往けり。二五 遂に海の彼方にてイエスに遇ひて言ふ『ラビ、何時ここに來り給ひしか』二六 イエス答へて言ひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならで、パンを食ひて飽きたる故なり。二七 朽ちる糧のためならで、永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに與へんとするものなり、父なる神は印して彼を證し給ひたるに因る』二八 ここに彼ら言ふ『われら神の業を行はんには何をなすべきか』二九 イエス答へて言ひたまふ『神の業はその遣し給へる者を信する是なり』三〇 彼ら言ふ『さらば我らが

見て汝を信ぜしために、何の徴をなすか、何を行ふか。三一 我らの先祖は荒野にてマナを食へり、録して、天よりパンを彼らに與へて食はしめたり』と云へるが如し』三一 イエス言ひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝らに與へしにあらざ、されど我が父は天よりの眞のパンを與へたまふ。三二 神のパンは天より降りて生命を世に與ふるものなり』三四 彼等いふ『主よ、そのパンを常に與へよ』三五 イエス言ひ給ふ『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。三六 されど汝らは我を見てなほ信ぜず、我さきに之を告げたり。三七 父の我に賜ふものは皆われに來らん、我にきたる者は我これを退けず。三八 夫わが天より降りしは、我が意をなさん爲にあらず、我を遣し給ひし者の御意をなさん爲なり。三九 我を遣し給ひし者の御意は、すべて我に賜ひし者を、我その一つをも失はずして、終の日に甦へらする是なり。四〇 わが父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦へらすべし』

四一 ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言ひ給ひしにより、四二 呟きて言ふ『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今、われは天より降り』と言ふか』四三 イエス答へて言ひ給ふ『なんぢら呟き合ふな、四四 我を遣しし父ひき給はずば、誰も我に來ること能はず、我これを終の日に甦へらすべし。四五 預言者たちの書に、彼らみな神に教

へられん」と録されたり。すべて父より聽きて學びし者は我にきたる。四六これは父を見し者ありとにあらず、ただ神よりの者のみ父を見たり。四七まことに誠になんぢらに告ぐ、信する者は永遠の生命をもつ。四八我は生命のパンなり。四九汝らの先祖は、荒野にてマナを食ひしが死にたり。五〇天より降るパンは、食ふ者をして死ぬる事ならしむるなり。五一我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食はば永遠に活くべし。我が與ふるパンは我が肉なり、世の生命のために之を與へん」

五二ここにユダヤ人たがひに争ひて言ふ「この人はいかで己が肉を我らに與へて食はしむることを得ん」五三イエス言ひ給ふ「まことに誠になんぢらに告ぐ、人の子の肉を食はず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。五四わが肉をくらひ、我が血をのむ者は、永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦へらすべし。五五夫わが肉は眞の食物、わが血は眞の飲物なり。五六わが肉をくらひ我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。五七活ける父の我をつかはし、我の父によりて活くるごとく、我をくらふ者も我によりて活くべし。五八天より降りしパンは、先祖たちが食ひてなほ死しし如きものにあらず、此のパンを食ふものは永遠に活きん」五九此等のことはイエス、カペナウムにて教ふるとき、會堂にて言ひ給ひしなり。

六〇弟子たちの中おほくの者これを聞きて言ふ「こは甚だしき言なるかな、誰か能く聽き得べき」六一イエス弟子たちの之に就き

て咄くを自ら知りて言ひ給ふ「このことは汝らを躓かするか。六二さらば人の子のものと居りし處に昇るを見ば如何に。六三活すものは靈なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、靈なり、生命なり。六四されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり、イエス初より、信ぜぬ者どもは誰、おのれを賣る者は誰なるかを知り給へるなり。六五かくて言ひたまふ「この故に我さきに汝らに告げて、父より賜はりたる者ならずば我に來るを得ずと言ひしなり」

六六ここにおいて、弟子たちのうち多くの者がかへり去りて、復イエスと共に歩まざりき。六七イエス十二弟子に言ひ給ふ「なんじらも去らんとするか」六八シモン・ペテロ答ふ「主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。六九又われらは信じかつ知る、なんぢは神の聖者なり」七〇イエス答へ給ふ「われ汝ら十二人を選びしにあらずや、然るに汝らの中の一人は惡魔なり」七一イスカリオテのシモンの子ユダを指して言ひ給へるなり、彼は十二弟子の一人なれど、イエスを賣らんとする者なり。

## 第七章

一この後イエス、ガリラヤのうちを巡りぬ給ふ、ユダヤ人の殺ざんとするに因りて、ユダヤのうちを巡ることを欲し給はぬなり。ニユダヤ人の假廬の祭ちかづきたれば、三兄弟たちイエスに言ふ「なんぢの行ふ業を弟子たちにも見せんために、此處を去りて

ユダヤに往け。四誰にても自ら顯れんことを求めて、隱に業をなす者なし。汝これらの事を爲すからには、己を世にあらはせ。五はその兄弟たちもイエスを信ぜぬ故なり。六ここにイエス言ひ給ふ「わが時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。七世は汝らを憎むこと能はねど我を憎む、我は世の所作の惡しきを證すればなり。八なんぢら祭に上れ、わが時いまだ滿たねば、我は今この祭にのぼらず。九かく言ひて尚ガリラヤに留り給ふ。一〇而して兄弟たちの祭にのぼりたる後、あらはならで潜びやかに上り給ふ。一一祭にあたりユダヤ人らイエスを尋ねて「かれは何處に居るか」と言ふ。一二また群衆のうちに囁く者おほくありて、或は「イエスは善き人なり」といひ、或は「いな、群衆を惑すなり」と言ふ。一三されどユダヤ人を懼るるに因りて、誰もイエスのことを公然に言はず。

一四 祭も、はや半となりし頃、イエス宮にのぼりて教へ給へば、一五 ユダヤ人あやしみて言ふ「この人は學びし事なきに、如何にして書を知るか」一六 イエス答へて言ひ給ふ「わが教はわが教にあらざ、我を遣し給ひし者の教なり。一七人もし御意を行はんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。一八己より語るものは己の榮光をもとむ、己を遣しし者の榮光を求むる者は眞なり、その中に不義なし。一九モーセは汝らに律法を與へしにあらざや、されど汝等のうちに律法を守る者なし。汝ら何ゆゑ我を殺さんとするか」二〇 群衆こたふ「なんぢは惡鬼に

憑かれたり、誰が汝を殺さんとするぞ」二一 イエス答へて言ひ給ふ「われ一つの業をなしたれば、汝等みな怪しめり。二三モーセは汝らに割禮を命じたり（これはモーセより起りしとにあらざ、先祖より起りしなり）この故に汝ら安息日にも人に割禮を施す。二三モーセの律法の廢らぬために、安息日に人の割禮を受くる事あらば、何ぞ安息日に人の全身を健かにせしめて我を怒るか。二四 外貌によりて裁くな、正しき審判にて審け」

二五ここにエルサレムの或人々いふ「これは人々の殺さんとする者ならずや。二六 視よ、公然に語るに、之に對して何をも言ふ者なし、司たちは此の人のキリストたるを眞に認めしならんか。二七 されど我らは此の人の何處よりかを知る、キリストの來る時には、その何處よりかを知る者なし」二八ここにイエス宮にて教へつつ呼はりて言ひ給ふ「なんぢら我を知り、亦わが何處よりかを知る。されど我は己より來るにあらざ、眞の者ありて我を遣し給へり。汝らは彼を知らず、二九 我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給ひしに因りてなり」三〇ここに人々イエスを捕へんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する者なかりき。三一 かくて群衆のうち多くの人々イエスを信じて「キリスト來るとも、此の人の行ひしより多く徴を行はんや」と言ふ。三二 イエスにつきて群衆のかく囁くことパリサイ人の耳に入りたれば、祭司長、パリサイ人ら彼を捕へんとて下役どもを遣ししに、三三 イエス言ひ給ふ「我なほ暫く汝らと偕に居り、而しての

ち我を遣し給ひし者の御許に往く。三四 汝ら我を尋ねん、されど逢はざるべし、汝等わが居る處に往くこと能はず。三五 ここにユダヤ人ら互に云ふ。『この人われらの逢ひ得ぬいづこに往かんとするか、ギリシヤ人のうちに散りをる者に往きて、ギリシヤ人を教へんとするか。』三六 その言に、『なんぢら我を尋ねん、然れど逢はざるべし、汝ら我が居る處に往くこと能はず』と云へるは何ぞや。

三七 祭の終の大なる日に、イエス立ちて呼はりて言ひたまふ。『人もし渴かば我に來りて飲め。三八 我を信する者は、聖書に云へることく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし。』三九 これは彼を信する者の受けんとする御靈を指して言ひ給ひしなり。四〇 此等の言をききて群衆のうちの或人は、『これ眞にかの預言者なり』といひ、四一 或人は、『これキリストなり』と言ひ、又ある人は、『キリストいかでガリラヤより出でんや、四二 聖書に、キリストはダビデの裔またダビデの居りし村ベツレヘムより出づと云へるならずや』と言ふ。四三 斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛争おこりたり。四四 その中には、イエスを捕へんと欲する者もありしが、手出する者なかりき。

四五 而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に歸りたれば、彼ら問ふ。『なに故かれを曳き來らぬか』四六 下役ども答ふ。『この人の語るごとく語りし人は未だなし』四七 パリサイ人等これに答ふ

『なんぢらも惑されしか、四八 司たち又はパリサイ人のうちに、一人だに彼を信ぜし者ありや、四九 律法を知らぬこの群衆は詛はれたる者なり』五〇 彼等のうちの一人にてさきにイエスの許に來りしニコデモ言ふ、五一 『われらの律法は、先その人に聴き、その爲すとこるを知るにあらざば、審く事をせんや』五二 かれら答へて言ふ。『なんぢもガリラヤより出でしか、查へ見よ、預言者はガリラヤより起る事なし』

五三 『斯くておのおの己が家に歸れり。』

## 第八章

一 イエス、オリブ山にゆき給ふ。二 夜明ころ、また宮に入りしに、民みな御許に來りたれば、坐して教へ給ふ。三 ここに學者・パリサイ人ら、姦淫のとき捕へられたる女を連れきたり、眞中に立ててイエスに言ふ、四 『師よ、この女は姦淫のをり、そのまま捕へられたるなり。五 モーセは律法に、斯かる者を石にて撃つべき事を我らに命じたるが、汝は如何に言ふか』六 かく云へるは、イエスを試みて、訴ふる種を得んとてなり。イエス身を屈め、指にて地に物書き給ふ。七 かれら問ひて止まざれば、イエス身を起して、『なんぢらの中、罪なき者まつ石を擲て』と言ひ、八 また身を屈めて地に物書きたまふ。九 彼等これを聞きて良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人一人いでゆき、唯イエスと中に

立てる女とのみ遣れり。二〇イエス身を起して、女のほかに誰も居らぬを見て言ひ給ふ『をんなよ、汝を訴へたる者どもは何處にをるぞ、汝を罪する者なきか』二 女いふ『主よ、誰もなし』イエス言ひ給ふ『われも汝を罪せじ、往け、この後ふたたび罪を犯すな』

二 かくてイエスマた人々に語りて言ひ給ふ『われは世の光なり、我に従ふ者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』三 パリサイ人ら言ふ『なんぢは己につきて證す、なんぢの證は眞ならず』四 イエス答へて言ひ給ふ『われ自ら己につきて證すとも、我が證は眞なり、我は何處より來り何處に往くを知る故なり。汝らは何處より來り、何處に往くを知らず、一五 なんぢらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。一六 されど我もし審かば、我が審判は眞なり、我は一人ならず、我と我を遣し給ひし者と偕なるに因る。一七 また汝らの律法に、二人の證は眞なりと録されたり。一八 我みづから己につきて證をなし、我を遣し給ひし父も我につきて證をなし給ふ』一九 ここに彼ら言ふ『なんぢの父は何處にあるか』イエス答へ給ふ『なんぢらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』二〇 イエス宮の内にて教へし時、これらの事を賣錢函の傍らにて語り給ひしが、彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕ふる者なかりき。二 かくてまた人々に言ひ給ふ『われ往く、なんぢら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら來ること

能はず』三 ユダヤ人ら言ふ『わが往く處に汝ら來ること能はず』と云へるは、自殺せんとてか』三 イエス言ひ給ふ『なんぢらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我は此の世より出でず。二四 之によりて我なんぢらは己が罪のうちに死なんと云へるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』二五 彼ら言ふ『なんぢは誰なるか』イエス言ひ給ふ『われは正しく汝らに告げ來りし所の者なり。二六 われ汝らに就きて語るべきこと審くべきこと多し、而して我を遣し給ひし者は眞なり、我は彼に聽きしその事を世に告ぐるなり』二七 これは父をさして言ひ給へるを、彼らは悟らざりき。二八 ここにイエス言ひ給ふ『なんぢら人の子を擧げしものち、我の夫なるを知り、又わが己によりて何事も爲さず、ただ父の我に教へ給ひしごとく、此等のことを語りたるを知らん。二九 我を遣し給ひし者は、我とともに在す。我つねに御意に適ふことを行ふによりて、我を獨おき給はず』三〇 此等のことを語り給へるとき、多くの人々イエスを信じたり。

三〇 ここにイエス己を信じたるユダヤ人に言ひたまふ『汝等もし常に我が言に居らば、眞にわが弟子なり。三一 また眞理を知らん、而して眞理は汝らに自由を得さすべし』三二 かれら答ふ『われはアブラハムの裔にして、未だ人の奴隸となりし事なし。如何なれば、なんぢら自由を得べし』と云ふか』三四 イエス答へ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隸な

り。三〇 奴隷はとこしへに家に居らず、子は永遠に居るなり。三一  
この故に子もし汝らに自由を得させば、汝ら實に自由となら  
ん。三二 我は汝らがアブラハムの裔なるを知る、されど我が言な  
んぢらの衷に留らぬ故に、我を殺さんと謀る。三三 我はわが父の  
許にて見しことを語り、汝らは又なんぢらの父より聞きしこと  
を行ふ。三四 かれら答へて言ふ、われらの父はアブラハムなり。イ  
エス言ひ給ふ、もしアブラハムの子ならば、アブラハムの業をな  
さん。三五 然るに汝らは今、神より聴きたる眞理を汝らに告ぐる  
者なる我を殺さんと謀る。アブラハムは斯かることを爲さざり  
き。三六 汝らは汝らの父の業を爲すなり。かれら言ひ、われら  
淫行によりて生れず、我らの父はただ一人、即ち神なり。三七 イ  
エス言ひたまふ、神もし汝らの父ならば、汝ら我を愛せん、わ  
れ神より出でて来ればなり。我は己より来るにあらず、神われ  
を遣し給へり。三八 何故わが語ることを悟らぬか、是わが言をき  
くこと能はぬに因る。三九 汝らは己が父惡魔より出でて、己が父  
の慾を行はんことを望む。彼は最初より人殺なり、また眞その  
中になき故に眞に立たず、彼は虚偽をかたる毎に己より語る、そ  
れは虚偽者にして虚偽の父なればなり。四〇 然るに我は眞を告  
ぐるによりて、汝ら我を信ぜず。四一 汝等のうち誰か我を罪あ  
りとして責め得る。われ眞を告ぐるに、我を信ぜぬは何故ぞ。四  
二 神より出づる者は神の言をきく、汝らの聴かぬは神より出  
ぬに因る。四三 ユダヤ人こたへて言ふ、なんぢはサマリヤ人にて

悪鬼に憑かれたる者なりと、我らが云へるは宜ならずや。四九 イ  
エス答へ給ふ、われは悪鬼に憑かれず、反つて我が父を敬ふ、な  
んぢらは我を軽んず。五〇 我はおのれの榮光を求めず、之を求め  
かつ審判し給ふ者あり。五一 誠にまことに汝らに告ぐ、人もし我  
が言を守らば、永遠に死を見ざるべし。五二 ユダヤ人いふ、今ぞ  
なんぢが惡鬼に憑かれたるを知る。アブラハムも預言者たちも  
死にたり、然るに汝は、人もし我が言を守らば、永遠に死を味は  
ざるべし。と云ふ。五三 汝われらの父アブラハムよりも大なる  
か、彼は死に、預言者たちも死にたり、汝はおのれを誰とする  
か。五四 イエス答へたまふ、我もし己に榮光を歸せば、我が榮光  
は空し。我に榮光を歸する者は我が父なり、即ち汝らが己の神  
と稱ふる者なり。五五 然るに汝らは彼を知らず、我は彼を知る。  
もし彼を知らずと言はば、汝らの如く偽者たるべし。されど  
我は彼を知り、且その御言を守る。五六 汝らの父アブラハムは、  
我が日を見んとて樂しみ且これを見て喜べり。五七 ユダヤ人いふ  
、なんぢ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか。五八 イエ  
ス言ひ給ふ、まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生れいでぬ  
前より我は在るなり。五九 こゝに彼ら石をとりてイエスに擲たん  
としたるに、イエス隠れて宮を出て給へり。

第九章

一 イエス遂往くとき、生れながらの盲人を見給ひたれば、二弟子  
 たち問ひて言ふ『ラビ、この人の盲目にて生れしは、誰の罪によ  
 るぞ、己のか、親のか』三 イエス答へ給ふ『この人の罪にも親の  
 罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顯れん爲なり。四 我を遣し  
 給ひし者の業を我ら晝の間になさざる可からず。夜きたらん  
 その時は誰も動くこと能はず。五 われ世にをる間は世の光なり』  
 六 かく言ひて地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬり  
 て言ひ給ふ、七 『ゆきてシロアム（釋けば遣されたる者）の池に  
 て洗へ』乃ちゆきて洗ひたれば、見ゆることを得て歸れり。八 こ  
 こに隣人および前に彼の乞食なるを見し者ども言ふ『この人は  
 坐して物乞ひめたるにあらずや』九 或人は『夫なり』といひ、或  
 人は『否、ただ似たるなり』といふ。かの者『われは夫なり』と  
 言ひたれば、一〇 人々いふ『さらば汝の目は如何にして開きたる  
 か』二 答ふ『イエスといふ人、泥をつくり我が目に塗りて言ふ  
 『シロアムに往きて洗へ』と、乃ち往きて洗ひたれば、物見ること  
 を得たり』三 彼ら『その人は何處に居るか』と言へば『知ら  
 ず』と答ふ。  
 三 人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許に連れきたる。  
 四 イエスの泥をつくりて其の人の目をあけし日は安息日なり  
 き。五 パリサイ人らも亦いかにして物見ることを得しかと問

ひたれば、彼いふ『かの人わが目に泥をぬり、我これを洗ひて見  
 ゆることを得たり』六 パリサイ人の中なる或人は『かの人、安息  
 日を守らぬ故に、神より出でし者にあらず』と言ひ、或人は『罪  
 ある人いかで斯かる徴をなし得んや』と言ひて互に相争ひた  
 り。七 ここにまた盲目なりし人に言ふ『なんぢの目をあけしに  
 因り、汝は彼に就きて如何にいふか』彼いふ『預言者なり』八  
 ユダヤ人ら、彼が盲目なりしに見ゆるやうになりしことを、未だ  
 信ぜずして、目の開きたる人の兩親を呼び、一九 問ひて言ふ『こ  
 れは盲目にて生れしと言ふ汝らの子なりや、さらば今いかにし  
 て見ゆるか』二〇 兩親こたへて言ふ『かれの我が子なることと、  
 盲目にて生れたる事を知る。二一 されど今いかにして見ゆる  
 かを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に  
 問へ、年長けたれば自ら己がことを語らん』二三 兩親のかく言ひ  
 しはユダヤ人を懼れたるなり。ユダヤ人ら相議りて『若しイエ  
 スをキリストと言ひ顯す者あらば、除名すべし』と定めたるに因  
 る。二四 兩親の『かれ年長けたれば彼に問へ』と云へるは此の故  
 なり。二五 かれら盲目なりし人を再び呼びて言ふ『神に榮光を歸  
 せよ、我等はかの人の罪人たるを知る』二六 答ふ『かれ罪人なる  
 か、我は知らず、ただ一つの事をする、即ち我さきに盲目たり  
 しが、今見ゆることを得たる是なり』二七 彼ら言ふ『かれは汝に  
 何をなししか、如何にして目をあけしか』二八 答ふ『われ既に汝  
 らに告げたれど聴かざりき。何ぞまた聴かんとするか、汝らも

その弟子とならんことを望むか』二八 かれら罵りて言ふ『なんぢは其の弟子なり、我等モーセの弟子なり。二九 モーセに神の語り給ひしことを知れど、此の人の何處よりかを知らず』三〇 答へて言ふ『その何處よりかを知らずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。三一 神は罪人に聴き給はねど、敬虔にして御意をおこなふ人に聴き給ふことを我らは知る。三世の太初より、盲目にて生れし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。三三 かの人もし神より出でずば、何事をも爲し得ざらん』三四 かれら答へて『なんぢ全く罪のうちを生れながら、我らを教ふるか』と言ひて、遂に彼を追ひ出せり。

三五 イエスその追ひ出されしことを聞き、彼に逢ひて言ひ給ふ『なんぢ人の子を信するか』三六 答へて言ふ『主よ、それは誰なる乎、われ信ぜまほし』三七 イエス言ひ給ふ『なんぢ彼を見たり、汝と語る者は夫なり』三八 ここに彼、主よ、我は信ず』といひて拜せり。三九 イエス言ひ給ふ『われ審判の爲にこの世に來れり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん爲なり』四〇 パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言ふ『我らも盲目なるか』四一 イエス言ひ給ふ『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん、されど見ゆと言ふ汝らの罪は遣れり』

### 第一〇章

一 『まことに誠に汝らに告ぐ、羊の檻に門より入らずして、他より越ゆる者は、盗人なり、強盗なり。二 門より入る者は、羊の牧者なり。三 門守は彼のために開き、羊はその聲をきき、彼は己の羊の名を呼びて牽きいだす。四 悉とく其の羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その聲を知るによりて従ふなり。五 他の者には従はず、反つて逃ぐ、他の者どもの聲を知らぬ故なり』六 イエスこの譬を言ひ給へど、彼らその何事をかたり給ふかを知らざりき。

七 この故にイエス復いひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。ハすべて我より前に來りし者は、盗人なり、強盗なり、羊は之に聴かざりき。九 我は門なり、おほよそ我によりて入る者は救はれ、かつ出入をなし、草を得べし。一〇 盗人のきたるは盗み、殺し、亡ざんとするの他なし。わが來るは羊に生命を得しめ、かつ豊に得しめん爲なり。一一 我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。一二 牧者ならず、羊も己がものならぬ雇人は、豺狼のきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ、豺狼は羊をつばひ且ちらす。一三 彼は雇人にて、その羊を顧みぬ故なり。一四 我は善き牧者にして、我がものを知り、我がものは我を知る、一五 父の我を知り、我の父を知るが如し、我は羊のために生命を捨つ。一六 我には亦この檻のものならぬ他の羊

あり、之をも導かざるを得ず、彼らは我が聲をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。一七之によりて父は我を愛し給ふ、それは我ふたたび生命を得んために生命を捨つる故なり。一八人これを我より取るにあらず、我みづから捨つるなり。我は之をすつる權あり、復これを得る權あり、我この命令をわが父より受けたり』

一九これらの言によりて復ユダヤ人のうちに紛争おこり、二〇その中なる多くの者いふ「かれは悪鬼に憑かれて氣狂へり、何ぞ之にきくか」二 他の者ども言ふ「これは悪鬼に憑かれたる者の言にあらず、悪鬼は盲人の目をあけ得んや』

三三その頃エルサレムに宮潔の祭あり、時は冬なり。三三イエス宮の内、ソロモンの廊を歩きたまふに、三四 ユダヤ人ら之を取圍みて言ふ「何時まで我らの心を惑しむるか、汝キリストならば明白に告げよ」三五 イエス答へ給ふ「われ既に告げたれど汝ら信ぜず、わが父の名によりて行ふわざは、我に就きて證す。二六されど汝らは信ぜず、我が羊ならぬ故なり。二七わが羊はわが聲をきき、我は彼らを知り、彼らは我に従ふ。二八我かれらに永遠の生命を與ふれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、又かれらを我が手より奪ふ者あらず。二九彼らを我にあたへ給ひし我が父は、一切のものよりも大なれば、誰にても父の御手よりは奪ふこと能はず。三〇我と父とは一つなり」三二 ユダヤ人また石を取りあげてイエスを撃たんとす。三三 イエス答へ給ふ「われは父により

て多くの善き業を汝らに示したり、その孰の業ゆゑに我を石にて撃たんとするか」三三 ユダヤ人こたふ「なんぢを石にて撃つは善きわざの故ならず、瀆言の故にして、なんぢ人なるに、己を神とする故なり」三四 イエス答へ給ふ「なんぢらの律法に「われ言ふ、汝らは神なり」と録されたるに非ずや。三五 かく神の言を賜はりし人々を神と云へり。聖書は廢るべきにあらず、三六 然るに父の潔め別ちて世に遣し給ひし者が、われは神の子なり」と言へばとて、何ぞ「瀆言を言ふ」といふか。三七 我もし我が父のわざを行はずば、我を信すな、三八 もし行はば、假令われを信ぜずとも、その業を信ぜよ。さらば父の我にをり、我の父に居ることを知りて悟らん」三九 かれら復イエスを捕へんとせしが、その手より脱れて去り給へり。

四〇かくてイエス復ヨルダンの彼方、ヨハネの最初にバプテスマを施したる處にいたり、其處にとどまり給ひしが、四二 多くの人もとに來りて、ヨハネは何の徴をも行はざりしかど、この人に就きてヨハネの言ひし事は、ことごとく眞なりき』と言ふ。四三 而して多くの人がしこにてイエスを信じたり。

## 第一章

一ここに病める者あり、ラザロと云ふ、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。二此のマリヤは、主に香油をぬり、

頭髪にて御足を拭ひし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。三姉妹一人をイエスに遣して、主、視よ、なんぢの愛し給ふもの病めり」と言はしむ。四之を聞きてイエス言ひ給ふ、「この病は死に至らず、神の榮光のため、神の子のこれに由りて榮光を受けんためなり」五イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給へり。六ラザロの病みたるを聞きて、その居給ひし處になほ二日とどまり、七而してのち弟子たちに言ひ給ふ、「われら復ユダヤに往くべし」八弟子たち言ふ、「ラビ、この程もユダヤ人、なんぢを石にて撃たんとせしに、復かしこに往き給ふか」九イエス答へたまふ、「一日に十二時あるならずや、人もし晝あるかば、此の世の光を見るゆゑに躓くことなし。一〇夜あるかば、光その人になき故に躓くなり」一かく言ひて復その後いひ給ふ、「われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起さん爲に往くなり」二弟子たち言ふ、「主よ、眠れるならば癒ゆべし」三イエスは彼が死にたることを言ひ給ひしなれど、弟子たちは寢ねて眠れるを言ひ給ふと思へるなり。一四ここにイエス明白に言ひ給ふ、「ラザロは死にたり。一五我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめんとなり。されど我ら今その許に往くべし」一六デトモと稱ふるトマス、他の弟子たちに言ふ、「われらも往きて彼と共に死ぬべし」

一七さてイエス來り見給へば、ラザロの墓にあること既に四日なりき。一八ベタニヤはエルサレムに近くして、二十五丁ばかりの

距離なるが、一九數多のユダヤ人、マルタとマリヤとをその兄弟の事につき慰めんとして來れり。二〇マルタはイエス來給ふと聞きて出で迎へたれど、マリヤはなほ家に坐し居たり。二一マルタ、イエスに言ふ、「主よ、もし此處に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを。二三されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給ふとも、神は與へ給はん」二四イエス言ひ給ふ、「なんぢの兄弟は甦へるべし」二五マルタ言ふ、「をはりの日、復活のときに甦へるべきを知る」二六イエス言ひ給ふ、「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。二七凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか」二七彼いふ、「主よ然り、我なんぢは世に來るべきキリスト、神の子なりと信ず」二八かく言ひて後、ゆきて竊にその姉妹マリヤを呼びて、「師きてりて汝を呼びたまふ」と言ふ。二九マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。三〇イエスは未だ村に入らず、尚マルタの迎へし處に居給ふ。三十一マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと思ひて後に隨へり。三二かくてマリヤ、イエスの居給ふ處にいたり、之を見てその足下に伏し、「主よ、もし此處に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを」と言ふ。三三イエスがれが泣き居り、共に來りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言ひ給ふ、三四「かれを何處に置きしか」彼ら言ふ、「主よ、來りて見給へ」三五イエス涙をながし給ふ。三六ここにユダヤ人ら言

ふ「視よ、いかばかり彼を愛せしぞや」三七その中の或者ども言ふ「盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらしむること能はざりしか」三八イエスマた心を傷めつつ墓にいたり給ふ。墓は洞にして石を置いて塞げり。三九イエス言ひ給ふ「石を除けよ」死にし人の姉妹マルタ言ふ「主よ、彼ははや臭し、四日を經たればなり」四〇イエス言ひ給ふ「われ汝に、もし信せば神の榮光を見んと言ひしにあらずや」四二ここに人々石を除けたり。イエス目を擧げて言ひたまふ「父よ、我にきき給ひしを謝す。四三常にきき給ふを我は知る。然るに斯く言ふは、傍らに立つ群衆の爲にして、汝の我を遣し給ひしことを之に信せしめんとてなり」四三斯く言ひてのち、聲高く「ラザロよ、出で來れ」と呼び給へば、四四死にしも布にて足と手とを巻かれたるまま出で來る、顔も手拭にて包まれたり。イエス「これを解きて往かしめよ」と言ひ給ふ。

四五かくてマリヤの許に來りて、イエスの爲し給ひし事を見たる多くのユダヤ人、かれを信じたりしが、四六或者はパリサイ人に向きて、イエスの爲し給ひし事を告げたり。

四七二二に祭司長・パリサイ人の議會を開きて言ふ「われら如何に爲すべきか、此の人おほくの徴を行ふなり。四八もし彼をこのまま捨ておけば、人々みな彼を信ぜん、而して 로마人きたりて、我らの土地と國人とを奪はん」四九その中の一人にて此の年の大祭司なるカヤパ言ふ「なんぢら何を知らず。五〇ひとりの人

民のために死にて、國人すべての滅びぬは、汝らの益なるを思はぬなり」五一これは己より云へるに非ず、この年の大祭司なれば、イエスの國人のため、五二又ただに國人の爲のみならず、散りたる神の子らを一つに集めん爲に死に給ふことを預言したるなり。五三彼等この日よりイエスを殺さんと議れり。

五四されば此の後イエス顯にユダヤ人のなかを歩み給はず、此處を去りて、荒野にちかき處なるエフライムといふ町に往き、弟子たちと偕に其處に留りたまふ。五五ユダヤ人の過越の祭近づきたれば、多くの人々身を潔めんとて、祭のまへに田舎よりエルサレムに上れり。五六彼らイエスをたづね、宮に立ちて互に言ふ「なんぢら如何に思ふか、彼は祭に來らぬか」五七祭司長・パリサイ人は、イエスを捕へんとて、その在處を知る者あらば、告げ出づべく預て命令したりしなり。

## 第二章

一過越の祭の六日前に、イエス、ベタニヤに來り給ふ、ここは死人の中より甦へらせ給ひしラザロの居る處なり。ニ此處にてイエスのために饗宴を設け、マルタは事へ、ラザロはイエスと共に席に著ける者の中にあり。三マリヤは價高き混りなきナルドの香油一斤を持ち來りて、イエスの御足にぬり、己が頭髮にて御足を拭ひしに、香油のかをり家に満ちたり。四御弟子の一人

にて、イエスを賣らんとするイスカリオテのユダ言ふ、五『何ぞこの香油を三百デナリに賣りて、貧しき者に施さざる』六かく云へるは貧しき者を思ふ故にあらず、おのれ盗人にして、財囊を預り、その中に納むる物を掠めればなり。セイエス言ひ給ふ『この女の爲すに任せよ、我が葬りの日のために之を貯へたるなり。八貧しき者は常に汝らと偕に居れども、我は常に居らぬなり』

九ユダヤの多くの民ども、イエスの此處に居給ふことを知りて來る、これはイエスの爲のみにあらず、死人の中より甦へらせ給ひシラザロを見んとてなり。一〇かくて祭司長ら、ラザロをも殺さんと議る。二彼のために多くのユダヤ人さり往きてイエスを信ぜし故なり。

三二明くる日、祭に來りし多くの民ども、イエスのエルサレムに來り給ふをきき、三棕栢の枝をとりて出で迎へ、『ホサナ、讚むべきかな、主の御名によりて來る者』イスラエルの王』と呼はる。一四イエスは小驢馬を得て之に乗り給ふ。これは録して、一五『シオンの娘よ、懼るな。視よ、なんぢの王は驢馬の子に乗りて來り給ふ』と有るが如し。一六弟子たちは最初これらの事を悟らざりしが、イエスの榮光を受け給ひし後に、これらの事のイエスに就きて録されたと、人々が斯く爲ししを思ひ出せり。一七ラザロを墓より呼び起し、死人の中より甦へらせ給ひし時に、イエスと偕に居りし群衆、證をなせり。一八群衆のイエスを迎

へたるは、かかる徴を行ひ給ひしことを聞きたるに因りてなり。一九パリサイ人ら互に言ひ、『見るべし、汝らの謀ることの益なきを。視よ、世は彼に従へり』

二〇禮拜せんとて祭に上りたる者の中に、ギリシヤ人數人ありしが、三ガリラヤなるベツサイダのピリポに來り、請ひて言ひ、君よ、われらイエスに謁えんことを願ふ。三二ピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレとピリポと共に往きてイエスに告ぐ。三三イエス答へて言ひ給ふ、『人の子の榮光を受くべき時きたれり。二四誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麥、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。二五己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。二六人もし我に事へんとせば、我に従へ、わが居る處に我に事ふる者もまた居るべし。人もし我に事ふることをせば、我が父これを賞ひ給はん。二七今わが心さわぐ、われ何を言ふべきか。父よ、この時より我を救ひ給へ、されど我この爲にこの時に到れり。二八父よ、御名の榮光をあらはし給へ』ここに天より聲いでて言ひ、『われ既に榮光をあらはしたり、復さらに顯さん』二九傍らに立てる群衆これを聞きて、『雷鳴鳴れり』と言ひ、ある人々は、『御使かれに語れるなり』と言ふ。三〇イエス答へて言ひ給ふ、『この聲の來りしは、我が爲にあらず、汝らの爲なり。三一今この世の審判は來れり、今この世の君は逐ひ出さるべし。三二我もし地より擧げられなば、凡ての

人をわが許に引きよせん』三かく言ひて、己が如何なる死にて死ぬるかを示し給へり。四 群衆こたふ「われら律法によりて、キリストは永遠に存へ給ふと聞きたるに、汝いかなれば人の子は擧げらるべしと言ふか、その人の子とは誰なるか」三五 イエス言ひ給ふ「なほ暫し光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて、暗黒に追及かれぬやうにせよ、暗き中を歩む者は往方を知らず。三六 光の子とならなために、光のある間に光を信ぜよ」

イエス此等のことを語りてのち、彼らを避けて隠れ給へり。三七 かく多くの徴を人々の前におこなひ給ひたれど、なほ彼を信ぜざりき。三八 これ預言者イザヤの言の成就せん爲なり。曰く『主よ、我らに聞きたる言を誰か信ぜし。』

主の御腕は誰にあらはれし』

三九 彼らが信じ得ざりしは此の故なり。即ちイザヤまた云へらく、

四〇 『彼らの眼を暗くし、心を頑固にし給へり。これ目にて見、心にて悟り、

ひるがへりて、

我に醫さる事なからん爲なり』

四一 イザヤの斯く云へるは、その榮光を見し故にて、イエスに就きて語りしなり。四二 されど司たちの中にもイエスを信じたるもの多かりしが、パリサイ人の故によりて言ひ顯すことをせざりき、除名せられん事を恐れたるなり。四三 彼らは神の譬よりも

人の譬を愛でしなり。

四四 イエス呼はりて言ひ給ふ「われを信する者は我を信するにあらず、我を遣し給ひし者を信じ、四五 我を見る者は我を遣し給ひし者を見るなり。四六 我は光として世に來れり、すべて我を信する者の暗黒に居らざらん爲なり。四七 人たとひ我が言をききて守らずとも、我は之を審かず。夫わが來りしは世を審かん爲にあらず、世を救はん爲なり。四八 我を棄て我が言を受けぬ者を審く者あり、わが語れる言こそ終の日に之を審くなれ。四九 我はおのれに由りて語れるにあらず、我を遣し給ひし父みづから、我が言ふべきこと語るべきことを命じ給ひし故なり。五〇 我その命令の永遠の生命たるを知る。されば我は語るに我が父の我に言ひ給ふまを語るなり』

### 第二三章

一 過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の來れるを知り、世に在る己の者を愛して、極まで之を愛し給へり。ニ夕餐のとき、惡魔早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを賣らんとする思を入れたるが、三イエス父が萬物をおのが手にゆだね給ひしことと、己の神より出でて神に到ることを知り、四夕餐より起ちて上衣をぬぎ、手巾をとりて腰にまとひ、五尋で盥に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏

ひたる手巾にて之を拭ひはじめ給ふ。六かくてシモン・ペテロに至り給へば、彼れいふ「主よ、汝わが足を洗ひ給ふか」セイエス答へて言ひ給ふ「わが爲すことを汝いまは知らず、後に悟るべし」ハペテロ言ふ「永遠に我が足をあらひ給はざれ」イエス答へ給ふ「我も洗はずば、汝われと關係なし」ルシモン・ペテロ言ふ「主よ、わが足のみならず、手をも頭をも」一〇イエス言ひ給ふ「すでに浴したる者は足のほか洗ふを要せず、全身きよきなり。斯く汝らは潔し、されど悉とくは然らず」一これ己を賣る者の誰なるを知りたまふ故に「ことごとくは潔からず」と言ひ給ひしなり。

二三彼らの足をあらひ、己が上衣をとり、再び席につきて後いひ給ふ「わが汝らに爲したることを知るか。二三なんぢら我を師また主となふ、然か言ふは宜なり、我は是なり。二四我は主また師なるに、尚なんぢらの足を洗ひたれば、汝らも互に足を洗ふべきなり。二五われ汝らに模範を示せり、わが爲しごとく汝らも爲さんためなり。二六誠にまことに汝らに告ぐ、僕はその主よりも大ならず。遣されたる者は之を遣す者よりも大ならず。二七汝等これらの事を知りて之を行はば幸福なり。一八これ汝ら凡ての者につきて言ふにあらず、我はわが選びたる者どもを知る。されど聖書に「我とともにパンを食ふ者、われに向ひて踵を擧げたり」と云へることは、必ず成就すべきなり。一九今その事の成らぬ前に之を汝らに告ぐ、事の成らん時、わが夫なるを汝

らの信ぜんためなり。二〇誠にまことに汝らに告ぐ、わが遣す者を受くる者は我をつくるなり。我を受くる者は我を遣し給ひし者を受くるなり」

三イエス此等のことを言ひ終へて、心さわぎ證をなして言ひ給ふ「まことに誠に汝らに告ぐ、汝らの中の一人われを賣らん」三弟子たち互に顔を見合せ、誰につきて言ひ給ふかを訝る。三イエスの愛したまふ一人の弟子、イエスの御胸によりそひ居たれば、二四シモン・ペテロ首にて示し、誰のことを言ひ給ふか、告げよ」といふ。二五彼そのまま御胸によりかかりて「主よ、誰なるか」と言ひしに、二六イエス答へ給ふ「わが一撮の食物を浸して與ふる者は夫なり」かくて一撮の食物を浸して、シモンの子イスカリオテのユダに與へたまふ。二七ユダ一撮の食物を受くるや、悪魔かれに入りたり。イエス彼に言ひたまふ「なんぢが爲すことを速かに爲せ」二八席に著きあたる者は一人として、何故かく言ひ給ふかを知らず。二九ある人々は、ユダが財囊を預るによりて「祭のために要する物を買へ」とイエスの言ひ給へるか、また貧しき者に何か施さしめ給ふならんと思へり。三〇ユダ一撮の食物を受くるや、直ちに出發、時は夜なりき。

三一ユダの出でし後、イエス言ひ給ふ「今や人の子、榮光をつく、神も彼によりて榮光をつけ給ふ。三二神かれに由りて榮光をつけ給はば、神も己によりて彼に榮光を與へ給はん、直ちに與へ給ふべし。三三若子よ、我なほ暫く汝らと偕にあり、汝らは我を

尋ねん、されど曾てユダヤ人に「なんぢらは我が行く處に来るこ  
と能はず」と言ひし如く、今汝らにも然か言ふなり。三四 われ新  
しき誠命を汝らに與ふ、なんぢら相愛すべし。わが汝らを愛せ  
しごとく、汝らも相愛すべし。三五 互に相愛する事をせば、之に  
よりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん」

三六 シモン・ペテロ言ふ「主よ、何處にゆき給ふか」イエス答へ  
給ふ「わが行く處に、なんぢ今は從ふこと能はず。されど後に從  
はん」三七 ペテロ言ふ「主よ、いま從ふこと能はぬは何故ぞ、我  
は汝のために生命を棄てん」三八 イエス答へ給ふ「なんぢ我がた  
めに生命を棄つるか、誠にまことに汝に告ぐ、なんぢ三度われ  
を否むまでは、鷄鳴かざるべし」

第一章

一 「なんぢら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。二 わが  
父の家には住處おほし、然らずば我がかねて汝らに告げしならん。  
われ汝等のために處を備へに往く。三 もし往きて汝らの爲に處  
を備へば、復きたりて汝らを我がもとに迎へん、わが居るところ  
に汝らも居らん爲なり。四 汝らは我が往くところに至る道を知  
る」五 トマス言ふ「主よ、何處にゆき給ふかを知らず、いかでそ  
の道を知らんや」六 イエス彼に言ひ給ふ「われは道なり、眞理な  
り、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。

七 汝等もし我を知りたらば、我が父をも知りしならん。今より  
汝ら之を知る、既に之を見たり」八 ピリポ言ふ「主よ、父をわれ  
に示し給へ、さらば足れり」九 イエス言ひ給ふ「ピリポ、我かく  
久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を  
見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言ふか。一〇 我の父  
に居り、父の我に居給ふことを信ぜぬか。わが汝等にいふ言  
は、己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこなひ  
給ふなり。一 一 わが言ふことを信ぜよ、我は父にをり、父は我に  
居給ふなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。二 誠にま  
ことに汝らに告ぐ、我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之  
よりも大なる業をなすべし、われ父に往けはなり。三 汝らが我  
が名によりて願ふことは、我みな之を爲さん、父、子によりて  
榮光を受け給はんためなり。四 何事にても我が名によりて我  
に願はば、我これを成すべし。五 汝等もし我を愛せば、我が  
誠命を守らん。一六 われ父に請はん、父は他に助主をあたへて、  
永遠に汝らと偕に居らしめ給ふべし。一七 これは眞理の御靈な  
り、世はこれを受くること能はず、これを見ず、また知らぬに因  
る。なんぢらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に  
居給ふべければなり。一八 我なんぢらを遣して孤兒とはせず、汝  
らに来るなり。一九 暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我  
を見る、われ活ければ汝らも活くべければなり。二〇 その日に  
は、我が父に居り、なんぢら我に居り、われ汝らに居ることを

汝ら知らん。二 わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顯すべし。三 イスカリオテならぬユダ言ふ、主よ、何故おのれを我らに顯して、世には顯し給はぬか。四 イエス答へて言ひ給ふ、人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住處を之とともにせん。四 我を愛せぬものは、わが言を守らず。汝らが聞くとこの言は、わが言にあらず、我を遣し給ひし父の言なり。

三五 此等のことは我なんぢらと偕にありて語りしが、二六 助主すなはちわが名によりて父の遣したまふ聖靈は、汝らに萬の事ををしへ、又すべて我が汝らに言ひしことを思ひ出さしむべし。二七 われ平安を汝らに遣す、わが平安を汝らに與ふ。わが與ふるは世の與ふる如くならず、なんぢら心を騒がすな、また懼るな。二八 「われ往きて汝らに來るなり」と云ひしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば、父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大なるに因る。二九 その事の成らぬ前に、これを汝らに告げたり、事の成らんとし汝らの信せんためなり。三〇 今より後われ汝らと多く語り、この世の君きたる故なり。彼は我に對して何の權もなし、三 されど斯くなるは、私の父を愛し、父の命じ給ふところに遵ひて行ふことを、世の知らん爲なり。起きよ、いざ此處を去るべし。

第一五章

一 我は眞の葡萄の樹、わが父は農夫なり。二 おほよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん爲に之を潔めたまふ。三 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。四 我に居れ、さらば我なんぢらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能はぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。五 我は葡萄の樹、なんぢらは枝なり。人もし我にをり、我また彼にをらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も爲し能はず。六 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。七 汝等もし我に居り、わが言なんぢらに居らば、何にても望に隨ひて求めよ、さらば成らん。八 なんぢら多くの果を結ばば、わが父は榮光を受け給ふべし、而して汝等わが弟子とならん。九 父の我を愛し給ひしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。一〇 なんぢら若しわが誠命をまもらば、我が愛にをらん、我が父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。一一 我これらの事を語りたるは、我が喜悅の汝らに在り、かつ汝らの喜悅の滿されん爲なり。一二 わが誠命は是なり、わが汝らに愛せしごとく互に相愛せよ。一三 人の友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。一四 汝等もし我が命ずる事をおこなはば、我が友なり。一五 今よりのち我なんぢらを僕といはず、僕は

主人のなす事を知らざるなり。我なんぢらを友と呼べり、我が父に聴きし凡ての事を汝らに知らせたればなり。一六 汝ら我を選びしにあらず、我なんぢらを選べり。而して汝らの往きて果を結び、且その果の残らんために、又おほよそ我が名によりて父に求むるものを、父の賜はんために汝らを立てたり。一七 これらの事を命ずるは、汝らの互に相愛せん爲なり。一八 世もし汝らを憎まば、汝等より先に我を憎みたることを知れ。一九 汝等もし世のものならば、世は己がものを愛するならん。汝らは世のものをならず、我なんぢらを世より選びたり。この故に世は汝らを憎む。二〇 わが汝らに、「僕はその主人より大ならず」と告げし言をおぼえよ。人もし我を責めしならば、汝等をも責め、わが言を守りしならば、汝らの言をも守らん。二三 すべて此等のことを我が名の故に汝らに爲さん、それは我を遣し給ひし者を知らぬに因る。二三 われ來りて語らざりしならば、彼ら罪なかりしならん。されど今はその罪いひのがるべき様なし。二三 我を憎むものは我が父をも憎むなり。二四 我もし誰もいまだ行はぬ事を彼らの中に行はざりしならば、彼ら罪なかりしならん。されど今ははや我をも我が父をも見たり、また憎みたり。二五 これは彼らの律法に「ひとびと故なくして我を憎めり」と録したる言の成就せん爲なり。二六 父の許より我が遣さんとする助主、すなはち父より出づる眞理の御靈のきたらんとし、我につきて證せん。二七 汝等もまた初より我とともに在りたれば證するなり。

第一六章

一 我これらの事を語りたるは、汝らの躓かざらん爲なり。二人なんぢらを除名すべし、然のみならず、汝らを殺す者みな自ら神に事ふと思ふとき來らん。三 これらの事をなすは、父と我とを知らぬ故なり。四 我これらの事を語りたるは、時いたりて我が斯く言ひしことを汝らの思ひいでん爲なり。初より此等のことを言はざりしは、我なんぢらと偕に在りし故なり。五 今われを遣し給ひし者にゆく、然るに汝らの中、たれも我に「何處にゆく」と問ふ者なし。六 唯これらの事を語りしによりて、憂なんぢらの心にみてり。七 されど、われ實を汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。我さらずば助主なんぢらに來らじ、我ゆかば之を汝らに遣さん。八 かれ來らんとし、世をして罪につき、義につき、審判につきて、過てるを認めしめん。九 罪に就きてとは、彼ら我を信ぜぬに因りてなり。一〇 義に就きてとは、われ父にゆき、汝ら今より我を見ぬに因りてなり。一一 審判に就きてとは、此の世の君さばかるるに因りてなり。一二 我なほ汝らに告ぐべき事あまたあれど、今なんぢら得耐へず。一三 されど彼すなはち眞理の御靈きたらん時、なんぢらを導きて眞理をことごとく悟らしめん。かれ己より語るにあらず、凡そ聞くところの事を語り、かつ來らんとする事どもを汝らに示さん。一四 彼はわが榮光を顯さん、それは我がものを受けて汝らに示すべければなり。一五 ず

べて父の有ち給ふものは我がものなり、此の故に我がものを受けて汝らに示さんと云へるなり。一六 暫くせば汝ら我を見ず、また暫くして我を見るべし。一七ここに弟子たちのうち或者たがひに言ふ、暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と言ひ、かつ、父に往くによりて」と言ひ給へるは、如何なることぞ。一八 復いふ、この暫くとは如何なることぞ、我等その言ひ給ふところを知らず。一九 イエスその問はんと思へるを知りて言ひ給ふ、なんぢら、暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と我が言ひしを尋ねあふか。二〇 誠にまことに汝らに告ぐ、なんぢらは泣き悲しみ、世は喜ばん。汝ら憂ふべし、然れどその憂は喜悅とならん。二一 をんな産まんとする時は憂あり、その期いたるに因りてなり。子を産みてのちは苦痛をおぼえず、世に人の生れたる喜悅によりてなり。二二 斯く汝らも今は憂あり、されど我ふたび汝らを見ん、その時なんぢらの心よるこぶべし、その喜悅を奪ふ者なし。二三 かの日には汝ら何事をも我に問ふまじ。誠にまことに汝らに告ぐ、汝等のすべて父に求むる物をば、我が名によりて賜ふべし。二四 なんぢら今までは何を我が名によりて求めたることなし。求めよ、然らば受けん、而して汝らの喜悅みたさるべし。

二五 我これらの事を譬にて語りたりしが、また譬にて語らず、明白に父のことを汝らに告ぐるとき來らん。二六 その日には汝等わが名によりて求めん。我は汝らの爲に父に請ふと言はず、二

七 父みづから汝らを愛し給へばなり。これ汝等われを愛し、また我が父より出で來りしことを信じたるに因る。二八 われ父より出でて世にきたれり、また世を離れて父に往くなり。二九 弟子たち言ふ、視よ、今は明白に語りて聊かも譬をいひ給はず。三〇 我ら今なんぢの知り給はぬ所なく、また人の汝に問ふを待ち給はぬことを知る。之によりて汝の神より出でたり給ひしことを信す。三一 イエス答へ給ふ、なんぢら今信するか。三二 視よ、なんぢら散されて各自おのが處にゆき、我をひとり遣すとき到らん、否すでに到れり。然れど我ひとり居るにあらず、父われと偕に在すなり。三三 此等のことを汝らに語りたるは、汝ら我に在りて平安を得んが爲なり。なんぢら世にありては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり。』

### 第十七章

一 イエスこれらの事を語りて、目を擧げ天を仰ぎて言ひ給ふ、父よ、時來れり、子が汝の榮光を顯さんために、汝の子の榮光を顯したまへ。二 汝より賜はりし凡ての者に、永遠の生命を與へしめんとて、萬民を治むる權威を子に賜ひたればなり。三 永遠の生命は、唯一の眞の神にいます汝と、なんぢの遣し給ひしイエス・キリストとを知るにあり。四 我に成さしめんとて汝の賜ひし業を成し遂げて、我は地上に汝の榮光をあらはせり。五 父よ、ま

だ世のあらぬ前に、わが汝と偕にもちたりし榮光をもて、今御前にて我に榮光あらしめ給へ。六世の中より我に賜ひし人々に、われ御名をあらはせり。彼らは汝の有なるを我に賜へり、而して彼らは汝の言を守りたり。七今かれらは、凡て我に賜ひしもの汝より出づるを知る。八我は我に賜ひし言を彼らに與へ、彼らは之を受け、わが汝より出でたるを眞に知り、なんぢの我を遣し給ひしことを信じたるなり。九我かれらの爲に願ふ、わが願ふは世のためならず、汝の我に賜ひたる者のためなり、彼らは即ち汝のものなり。一〇我がものは皆なんぢの有、なんぢの有は我がものなり、我かれらより榮光を受けたり。一一今より我は世に居らず、彼らは世に居り、我は汝にゆく。聖なる父よ、我に賜ひたる汝の御名の中に彼らを守りたまへ。これ我等のごとく、彼らの一つとならん爲なり。一二我かれらと偕にをる間、われに賜ひたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ保護したり。其のうち一人だに亡びず、ただ亡の子のみ亡びたり、聖書の成就せん爲なり。一三今は我なんぢにゆく、而して此等のことを世に在りて語るは、我が喜悅を彼らに全からしめん爲なり。一四我は御言を彼らに與へたり、而して世は彼らを憎めり、我の世のものならぬごとく、彼らも世のものならぬに因りてなり。一五わが願ふは、彼らを世より取り給はんことならず、惡より免れさせ給はんことなり。一六我の世のものならぬ如く、彼らも世のものならず。一七眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。

一八汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に遣せり。一九また彼等のために我は己を潔めわかつ、これ眞理にて彼らも潔め別たれん爲なり。二〇我かれらの爲のみならず、その言によりて我を信する者のためにも願ふ。二一これ皆一つとならん爲なり。父よ、なんぢ我に在し、我なんぢに居るごとく、彼らも我らに居らん爲なり、是なんぢの我を遣し給ひしことを世の信せん爲なり。二三我は汝の我に賜ひし榮光を彼らに與へたり、是われらの一つなる如く、彼らも一つとならん爲なり。二四即ち我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つとなりて全くせられん爲なり、是なんぢの我を遣し給ひしことと、我を愛し給ふごとく彼らをも愛し給ふこととを、世の知らん爲なり。二五父よ、望むらくは、我に賜ひたる人々の我が居るところに我と偕にをり、世の創の前より我を愛し給ひしによりて、汝の我に賜ひたる我が榮光を見んことを。二六正しき父よ、げに世は汝を知らず、されど我は汝を知り、この者どもも汝の我を遣し給ひしことを知れり。二七われ御名を彼らに知らしめたり、復これを知らしめん。これ我を愛し給ひたる愛の、彼らに在りて、我も彼らに居らん爲なり。

## 第一八章

一 此等のことを言ひ終へて、イエス弟子たちと偕にケデロンの

小川の彼方に出でたまふ。彼処に圍あり、イエス弟子たちともども入り給ふ。二ここは弟子たちと屢々あつまり給ふ處なれば、イエスを賣るユダもこの處を知れり。三かくてユダは一組の兵隊と祭司長・パリサイ人等よりの下役どもとを受けて、炬火・燈火・武器を携へて此處にきたる。四イエス己に臨まんとする事をことごとく知り、進みいでて彼らに言ひたまふ。誰を尋ぬるか。五答ふ。ナザレのイエスを。イエス言ひたまふ。我はそれなり。イエスを賣るユダも彼らと共に立てり。六。我はそれなりと言ひ給ひし時、かれら後退して地に倒れたり。七ここに再び、たれを尋ぬるか。と問ひ給へば、ナザレのイエスを。と言ふ。ハイエス答へ給ふ。われは夫なりと既に告げたり、我を尋ぬるならば此の人々の去るを容せ。九これさきに、なんぢの我に賜ひし者の中より、われ一人をも失はず。と言ひ給ひし言の成就せん爲なり。一〇シモン・ペテロ劍をもちたるが、之を抜き大祭司の僕を撃ちて、その右の耳を斬り落す。僕の名はマルコスと云ふ。二イエス、ペテロに言ひたまふ。劍を鞘に收めよ、父の我に賜ひたる酒杯は、われ飲まざらんや。

二二二ここにかの兵隊・千卒長・ユダヤ人の下役ども、イエスを捕へて縛り、三先づアンナスの許に曳ぎ往く、アンナスはその年の大祭司なるカヤパの舅なり。一四カヤパはさきにユダヤ人に、一人、民のために死ぬるは益なる事を勧めし者なり。

一五シモン・ペテロ及び他の一人の弟子、イエスに従ふ。この

弟子は大祭司に知られたる者なれば、イエスと共に大祭司の庭に入りしが、一六ペテロは門の外に立てり。ここに大祭司に知られたる彼の弟子いでて、門を守る女に物言ひてペテロを連れ入れしに、一七門を守る婢女、ペテロに言ふ。なんぢも彼の人の弟子の一人なるか。かれ言ふ。然らず。一八時寒くして僕・下役ども炭火を熾し、その傍らに立ちて暖まり居りしに、ペテロも共に立ちて暖まりたり。

一九ここに大祭司、イエスにその弟子とその教とにつきて問ひたれば、二〇イエス答へ給ふ。われ公然に世に語れり、凡てのユダヤ人の相集ふ會堂と宮とにて常に教へ、密には何を語りし事なし。三何ゆゑ我に問ふか、我が語れることは聴きたる人々に問へ。視よ、彼らは我が言ひしことを知るなり。三かく言ひ給ふとき、傍らに立つ下役の一人、手掌にてイエスを打ちて言ふ。かくも大祭司に答ふるか。三イエス答へ給ふ。わが語りし言もし悪しくば、その惡しき故を證せよ。善くは何とて打つぞ。二四ここにアンナス、イエスを縛りたるままにて、大祭司カヤパの許に送れり。

一五シモン・ペテロ立ちて暖まり居たるに、人々いふ。なんぢも彼が弟子の一人なるか。否みて言ふ。然らず。二六大祭司の僕の一にて、ペテロに耳を斬り落されし者の親族なるが言ふ。われ汝が圍にて彼と偕なるを見しならずや。二七ペテロまた否む折しも、鶏鳴きぬ。

二八かくて人々タイエスをカヤパの許より官邸にひきゆく、時は夜明なり。彼ら過越の食をなさんために、汚穢を受けじとて己らは官邸に入らず。二九ここにピラト彼らの前に出でゆきて言ふ『この人に對して如何なる訴訟をなすか』三〇答へて言ふ『もし惡をなしたる者ならずば汝に付さじ』三一ピラト言ふ『なんぢら彼を引取り、おのが律法に循ひて審け』ユダヤ人いふ『我らに人を殺す權威なし』三二これイエス、己が如何なる死にて死ぬるかを示して、言ひ給ひし御言の成就せん爲なり。

三三ここにピラトまた官邸に入り、イエスを呼び出して言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』三四イエス答へ給ふ『これは汝おのれより言ふか、將わが事を人の汝に告げたるか』三五ピラト答ふ『我はユダヤ人ならんや、汝の國人・祭司長ら汝を我に付したり、汝なにを爲ししぞ』三六イエス答へ給ふ『わが國はこの世のものならず、若し我が國この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付さじと戦ひしならん。然れど我が國は此の世よりのものならず』三七ここにピラト言ふ『されば汝は王なるか』イエス答へ給ふ『われ为王たることは汝の言へることし。我は之がために生れ、之がために世に來れり、即ち眞理につきて證せん爲なり。凡て眞理に屬する者は我が聲をきく』三八ピラト言ふ『眞理とは何ぞ』

かく言ひて再びユダヤ人の前に出でて言ふ『我この人に何の罪あるをも見ず。三九過越のとき我なんぢらに一人の囚人を赦す

例あり、されば汝らユダヤ人の王をわが赦さんことを望むか』四〇彼らまた叫びて『この人ならず、バラバを』と言ふ、バラバは強盜なり。

## 第二九章

一ここにピラト、イエスをとりて鞭うつ。二兵卒ども茨にて冠冕をあみ、その首にかむらせ、紫色の上衣をさせ、三御許に進みて言ふ『ユダヤ人の王やすかれ』而して手掌にて打てり。四ピラト再び出でて人々にいふ『視よ、この人を汝らに引出す、これは何の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん爲なり』五ここにイエス茨の冠冕をかむり、紫色の上衣をきて出で給へば、ピラト言ふ『視よ、この人なり』六祭司長・下役どもイエスを見て叫びいふ『十字架につけよ、十字架につけよ』ピラト言ふ『なんぢら自らとりて十字架につけよ、我は彼に罪あるを見ず』七ユダヤ人こたふ『我らに律法あり、その律法によれば死に當るべき者なり、彼はおのれを神の子となせり』八ピラトこの言をききて増々おそれ、九再び官邸に入りてイエスに言ふ『なんぢは何處よりぞ』イエス答をなし給はず。一〇ピラト言ふ『われに語らぬか、我になんちを赦す權威あり、また十字架につくる權威あるを知らぬか』一イエス答へ給ふ『なんぢ上より賜はらずば、我に對して何の權威もなし。この故に我をなんぢに付しし者の罪は更に

大なり』二三ここにおいてピラト、イエスを赦さんことを力む。されどユダヤ人さげびて言ふ、なんぢ若しこの人を赦さば、カイザルの忠臣にあらず、凡そおのれを王となす者はカイザルに叛くなり』三三ピラトこれらの言をききて、イエスを外にひきゆき、敷石(ヘブル語にてガバタ)といふ處にて審判の座につく。一四この日は過越の準備日にて、時は第六時ころなりき。ピラト、ユダヤ人にいふ、『視よ、なんぢらの王なり』二五かれら叫びていふ、『除け、除け、十字架につけよ』ピラト言ふ、『われ汝らの王を十字架につくべけんや』祭司長ら答ふ、『カイザルの他われらに王なし』一六ここにピラト、イエスを十字架に釘くるために彼らに付せり。

彼らイエスを受取りたれば、一七イエス己に十字架を負ひて、髑髏(ヘブル語にてゴルゴダ)といふ處に出でゆき給ふ。一八其處にて彼らイエスを十字架につく。又ほかに二人の者をともに十字架につけ、一人を右に、一人を左に、イエスを真中に置きり。一九ピラト罪標を書きて十字架の上に掲ぐ、『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と記したり。二〇イエスを十字架につけし處は都に近ければ、多くのユダヤ人この標を讀む、標はヘブル、ロマ、ギリシヤの語にて記したり。二二ここにユダヤ人の祭司長らピラトに言ふ、『ユダヤ人の王と記さず、我はユダヤ人の王なりと自稱せりと記せ』三三ピラト答ふ、『わが記したることは記したるままに』

二三兵卒どもイエスを十字架につけし後、その衣をとりて四つに分け、おのおの其の一二つを得たり。また下衣を取りしが、下衣は縫目なく、上より惣て織りたる物なれば、二四兵卒ども互にいふ、『これを裂くな、誰がうるか鬪にすべし』これは聖書の成就せん爲なり。曰く、『かれら互にわが衣をわけ、わが衣を鬪にせり』兵卒ども斯くなしたり。二五さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。二六イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言ひ給ふ、『をんなよ、視よ、なんぢの子なり』二七また弟子に言ひたまふ、『視よ、なんぢの母なり』この時より、その弟子かれを己が家に接けたり。

二八この後イエス萬の事の終りたるを知りて、聖書の全うせられん爲に、『われ渴く』と言ひ給ふ。二九ここに酸き葡萄酒の満ちたる器あり、その葡萄酒のふくみたる海綿をヒソプに著けてイエスの口に差附く。三〇イエスその葡萄酒をうけて後いひ給ふ、『事畢りぬ』遂に首をたれて靈をわたり給ふ。三二この日は準備日なれば、ユダヤ人、安息日に屍體を十字架のうへに留めおかじとて(殊にこの度の安息日は大なる日なるにより)ピラトに、彼らの脛ををりて屍體を取除かんことを請ふ。三三ここに兵卒ども來りて、イエスとともに十字架に釘けられたる第一の者と他のものとの脛を折り、三三而してイエスに來りしに、はや死に給ふを見て、その脛を折らず。三四然るに一人の

兵卒、鎗にてその脅をつきたれば、直ちに血と水と流れいづ。三  
五之を見しもの證をなす、其の證は眞なり、彼はその言ふことの  
眞なるを知る、これ汝等にも信せしめん爲なり。三六此等のこと  
の成りたるは『その骨くだかれず』とある聖句の成就せん爲な  
り。三七また他に『かれら己が刺したる者を見るべし』と云へる  
聖句あり。

三八この後、アリマタヤのヨセフとて、ユダヤ人を懼れ密にイエ  
スの弟子たりし者、イエスの屍體を引取らんことをピラトに請  
ひたれば、ピラト許せり、乃ち往きてその屍體を引取る。三九ま  
た曾て夜御許に來りしニコデモも、没藥・沈香の混和物を百斤  
ばかり携へて來る。四〇ここに彼らイエスの屍體をとり、ユダヤ  
人の葬りの習慣にしたがひて、香料とともに布にて巻けり。四一  
イエスの十字架につけられ給ひし處に園あり、園の中にいまだ  
人を葬りしことなき新しき墓あり。四二ユダヤ人の準備日なれ  
ば、この墓の近きままに其處にイエスを納めたり。

## 第二〇章

一 一週のはじめの日、朝まだき暗きうちに、マグダラのマリヤ  
墓にきたりて、墓より石の取除けあるを見る。二 乃ち走りゆき、  
シモン・ペテロとイエスの愛し給ひしかの弟子との許に到りて  
言ふ『たれか主を墓より取去れり、何處に置きしか我ら知らず』

三 ペテロと、かの弟子といひて墓にゆく。四 二人ともに走りたれ  
ど、かの弟子ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、五 屈みて  
の置きたるを見れど、内には入らず。六 シモン・ペテロ後れ來り、  
墓に入りて布の置きたるを視、七 また首を包みし手拭は布とと  
もに在らず、他のところにて巻きてあるを見る。八 先に墓にきたれ  
る彼の弟子もまた入り、之を見て信ず。九 彼らは聖書に録した  
る、死人の中よりその甦へり給ふべきことを未だ悟らざりしな  
り。一〇 遂に二人の弟子おのが家にかへり。

二 然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈み  
て墓の内を見るに、ニイエスの屍體の置かれし處に、白き衣を  
きたる二人の御使、首の方にひとり足の方にひとり坐しあ  
り。三 而してマリヤに言ふ『をんなよ、何ぞ泣くか』マリヤ言  
ふ『誰かが主を取去れり、何處に置きしか我ら知らず』一四 かく  
言ひて後に振反れば、イエスの立ち居給ふを見る、されどイエス  
たるを知らず。一五 イエス言ひ給ふ『をんなよ、何ぞ泣く、誰を  
尋ぬるか』マリヤは園守ならんと思ひて言ふ『君よ、汝もし彼  
を取去りしならば、何處に置きしかを告げよ、われ引取るべし』  
一六 イエスマリヤよと言ひ給ふ。マリヤ振反りて『ラボニ』釋  
けば師よ』と言ふ。一七 イエス言ひ給ふ『われに觸るな、我いま  
だ父の許に昇らぬ故なり。我が兄弟たちに往きて、我はわが父  
すなはち汝らの父、わが神すなはち汝らの神に昇る』といへ。一  
八 マグダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは主を見たり』と告

げ、また云々の事を言ひ給ひしと告げたり。

一九この日すなはち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて、居るところの戸を閉ぢおきしに、イエスキタリ彼らの中に立ちて言ひたまふ『平安なんぢらに在れ』二〇斯く言ひてその手と齶とを見せたまふ、弟子たち主を見て喜べり。二一イエスマた言ひたまふ『平安なんぢらに在れ、父の我を遣し給へることく、我も亦なんぢらを遣す』二三斯く言ひて、息を吹きかけ言ひたまふ『聖靈をつけよ。』三なんじら誰の罪を赦すとも其の罪ゆるされ、誰の罪を留むるとも其の罪とどめらるべし』二四イエス來り給ひしとき、十二弟子の一人デドモと稱ふるトマスとも居らざりしかば、二五他の弟子これに言ふ『われら主を見たり』トマスいふ『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその齶に差し入るにあらざれば信ぜじ』二六八日のち弟子たちまた家をり、トマスも偕に居りて戸を閉ぢおきしに、イエス來り、彼らの中に立ちて言ひたまふ『平安なんぢらに在れ』二七またトマスに言ひ給ふ『なんぢの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が齶にさしいれよ、信ぜぬ者とならで信する者となれ』二八トマス答へて言ふ『わが主よ、わが神よ』二九イエス言ひ給ふ『なんぢ我を見しによりて信じたり、見ずして信する者は幸福なり』

三〇この書に録さざる外の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行ひ給へり。三一されど此等の事を録しは、汝等をしてイエ

スの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが爲なり。

## 第二章

一この後、イエス復テベリヤの海邊にて己を弟子たちに現し給ふ、その現れ給ひしこと左のごとし。二シモン・ペテロ、デドモと稱ふるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら及びほかの弟子二人もともに居りしに、三シモン・ペテロ『われ漁獵にゆく』と言へば、彼ら『われらも共に往かん』と言ひ、皆いでて舟に乗りしが、その夜は何をも得ざりき。四夜明の頃イエス岸に立ち給ふに、弟子たち其のイエスなるを知らず。五イエス言ひ給ふ『子どもよ、獲物ありしか』彼ら『なし』と答ふ。六イエス言ひたまふ『舟の右のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん』乃ち網を下したるに、魚おびただしくして、網を曳き上ぐることに能はざりしかば、七イエスの愛し給ひし弟子、ペテロに言ふ『主なり』シモン・ペテロ『主なり』と聞きて、裸なりしを上衣をまとひて海に飛びいれり。八他の弟子たちは陸を離るること遠からず、僅に五十間ばかりなりしかば、魚の入りたる網を小舟にて曳き來り、九陸に上りて見れば、炭火ありてその上に肴あり、又パンあり。一〇イエス言ひ給ふ『なんぢらの今とりたる肴を少し持ちきたれ』一シモン・ペテロ舟に往きて網を陸に

曳き上げしに、百五十三尾の大なる魚満ちたり、斯く多かりしが網は裂けざりき。ニイエス言ひ給ふ『きたりて食せよ』弟子たちその主なるを知れば『なんぢは誰ぞ』と敢へて問ふ者もなし。ニイエス進みてパンをとり彼らに與へ、肴をも然なし給ふ。三四イエス死人の中より甦へりてのち、弟子たちに現れ給ひし事、これにて三度なり。

一五かくて食したる後、イエス、シモン・ペテロに言ひ給ふ『ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝りて我を愛するか』ペテロいふ『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんぢ知り給ふ』イエス言ひ給ふ『わが羔羊を養へ』一六また二度いひ給ふ『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ言ふ『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんぢ知り給ふ』イエス言ひ給ふ『わが羊を牧へ』一七三度いひ給ふ『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『われを愛するか』と言ひ給ふを憂ひて言ふ『主よ、知りたまはぬ處なし、わが汝を愛する事は、なんぢ識りたまふ』イエス言ひ給ふ『わが羊をやしなへ。一八まことに誠になんぢに告ぐ、なんぢ若かりし時は自ら帯して欲する處を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帯せられ、汝の欲せぬ處に連れゆかれん』一九これペテロが如何なる死にて神の榮光を顯すかを示して言ひ給ひしなり。斯く言ひて後かれに言ひ給ふ『われに従へ』二〇ペテロ振りて、イエスの愛したまひし弟子の従ふを見る。これはさきに夕餐のとき御胸に倚りかかりて『主よ、汝を

賣る者は誰か』と問ひし弟子なり。ニペテロこの人を見てイエスに言ふ『主よ、この人は如何に』ニイエス言ひ給ふ『よしや我、かれが我の來るまで留るを欲すとも、汝になにの關係あらんや、汝は我に従へ』三ここに兄弟たちの中に、この弟子死なずと云ふ話つたはりたり。されどイエスは死なずと言ひ給ひしにあらずよしや我、かれが我の來るまで留るを欲すとも、汝になにの關係あらんや』と言ひ給ひしなり。

一四これらの事につきて、證をなし、又これを録しし者は、この弟子なり、我等はその證の眞なるを知る。二五イエスの行ひ給ひし事はこの外なほ多し、もし一つ一つ録さば、我おもふに世界もその録すところの書を載するに耐へざらん。